

日本書道史

第11講「僧侶・画人・文人の書」

住川 英明（岐阜女子大学）

第11講 「僧侶・画人・文人の書」

【学習到達目標】

- 当時の和様書道，唐様書道のいずれの流れにも関わらず，個性的な書を書き，後にその書が高く評価されている人々の書について，具体的に説明することができる。

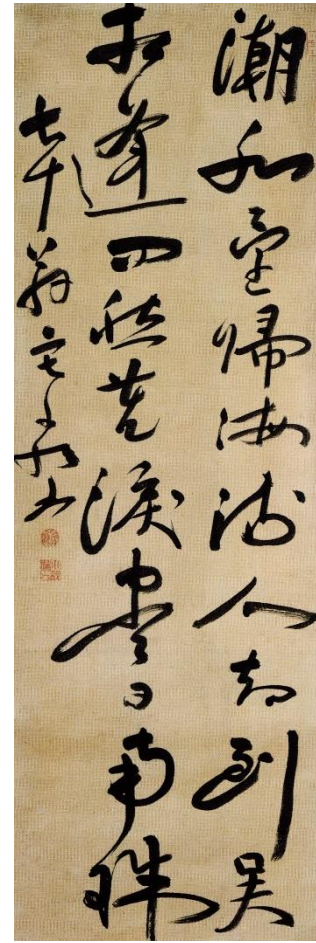
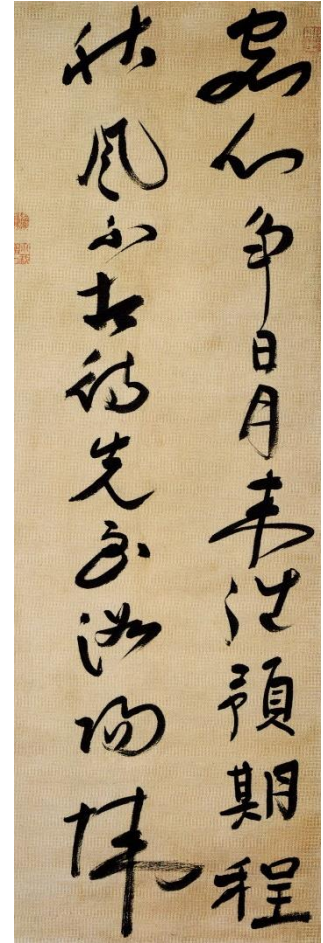
第11講 「僧侶・画人・文人の書」

1. 「逸脱派」の書

- 「逸脱派」（中田勇次郎）は、和様・唐様書道の流れから逸脱しているようであるが、実際にはその流れの渦中にいて、独自の書を遺した。
- 江戸期の僧侶・画人は、俗間にあってとらわれのない境地・境涯に生きようとする人々であり、書の技法について、安易に打ち捨てるのではなく、むしろそれに振り回されないような道理を求めていた。

第11講 「僧侶・画人・文人の書」

寂庵《唐詩四首》（部分）



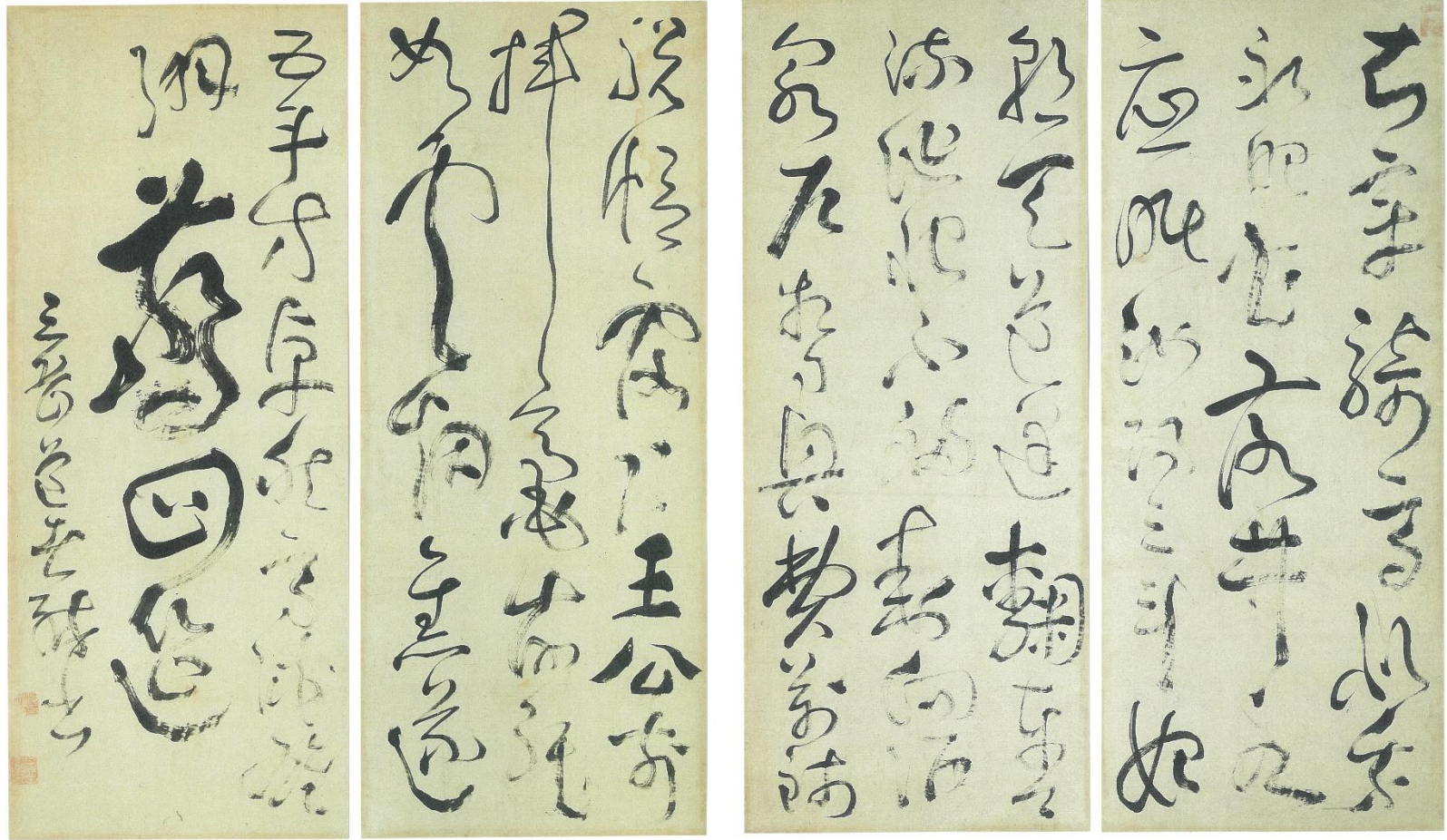
白隱《一鏃破三關》



慈雲《大道透長安》



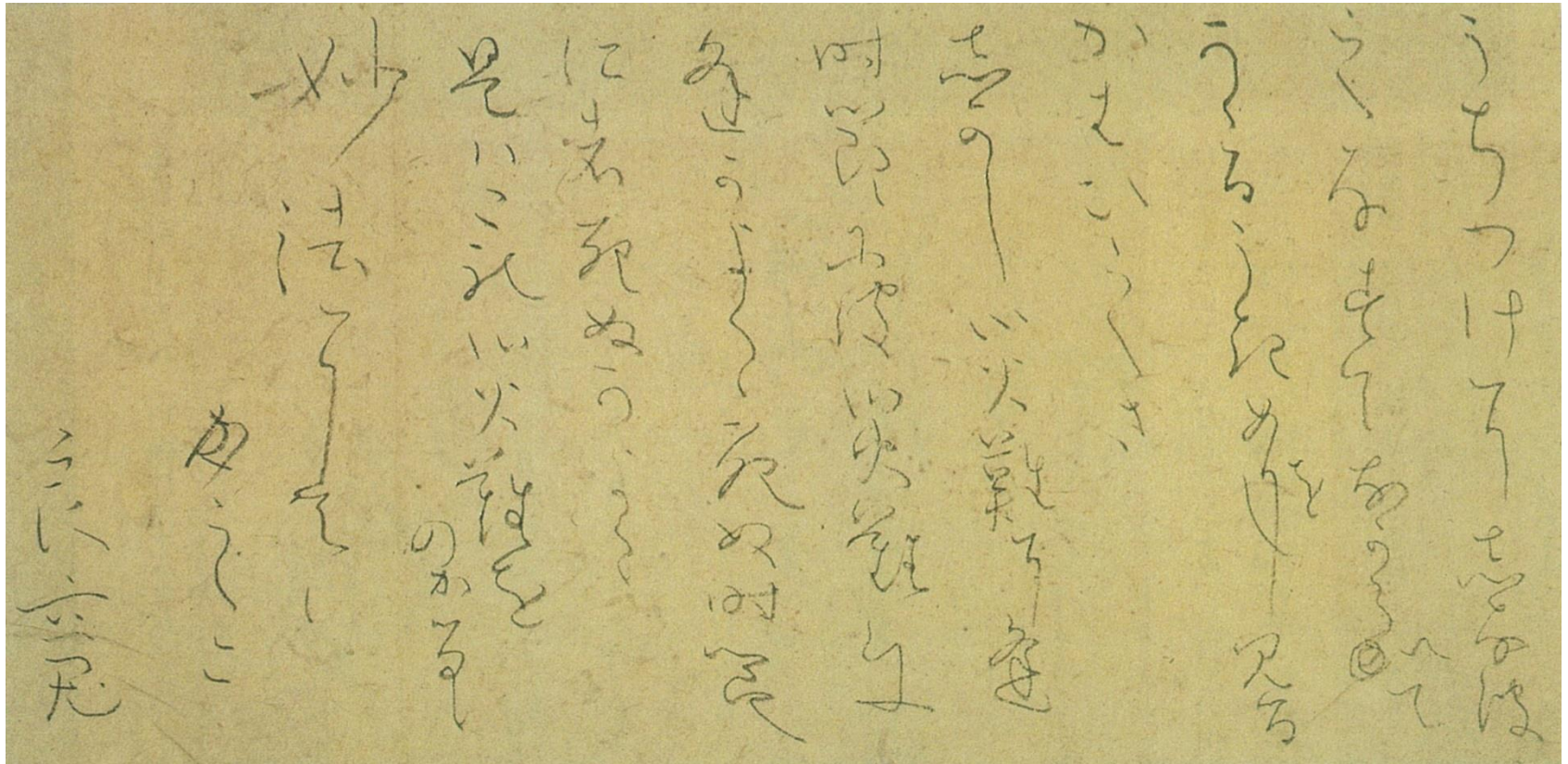
第11講 「僧侶・画人・文人の書」



池大雅 《飲中八仙歌屏風》（部分）

第11講 「僧侶・画人・文人の書」

良寛《書状》



第11講 「僧侶・画人・文人の書」

2. 良寛の書と明治期以降におけるその受容

- 良寛の書は、漢詩・和歌などの文学作品とともに、高く評価されている。
- 安田靉彦をはじめ、小林古徑・土田麦僊など、日本画家において良寛の書を愛好し、称揚して、自身の筆跡にもその影響を受けている人は多い。

第11講 「僧侶・画人・文人の書」

2. 良寛の書と明治期以降におけるその受容

- 良寛和尚の書から最初にうけるものは、きわめて素直な線質のよさである。それがのびのびとみごとに造型されて、純粹に、書というものの美を示してくれている。書のうつくしい線といえば、平安朝の仮名書きなどには、毛筆による線の究極に達しているものがある。あの幽婉な線を、盛装を凝らした麗人とするならば、良寛の仮名は、ふだん着のままの佳人といえるだろう。（安田靫彦「良寛の芸術」）

課題

1. 良寛の書は、明治以降において画人・文人の間で高く評価されている。その理由について、評価する意見とともに考察しなさい。

第11講 「僧侶・画人・文人の書」

【学習到達目標】

- 当時の和様書道，唐様書道のいずれの流れにも関わらず，個性的な書を書き，後にその書が高く評価されている人々の書について，具体的に説明することができる。

日本書道史

第11講「僧侶・画人・文人の書」

住川 英明（岐阜女子大学）